［職場］徳島県
［職業］中学校教諭

現在 徳島県

赴任国 ルワンダ共和国

［赴任地］　キガリ県ガサボ郡ンデラ
［職種］　理科教育
［派遣期間］2016年7月～2018年3月

現状に満足せず挑戦し続ける アフリカのイメージを変える教育を発信したい

布川 匠二さん　徳島県立城ノ内中等教育学校 教諭
Shoji Fukawa

JICAの教師海外研修で訪れたエチオピアで、発展途上国の教育に強い興味を持った。
現職教員特別参加制度を活用して立った舞台は、アフリカ・ルワンダ。現地の中高等学校で教えた実験は生徒を夢中にした。
帰国後は、理科主任として活躍しつつ、アフリカや途上国についての国際理解教育を子どもたちに発信し続けている。

自分だけの武器を求めて 青年海外協力隊へ

2014年、布川匠二さんはアフリカ・エチオピアで忘れられない10日間を過ごした。それは、たまたま職員室で手にとったパンフレットがきっかけで参加した、JICA教師海外研修だった。現地の様々な教育施設を訪れ、教材が足りない環境で奮闘する青年海外協力隊員の活動を目の当たりにした。日本とは勝手が違う発展途上国の教育現場に、強い興味を引かれた。

元々人に物を教えることが好きだった。どうすれば学力が伸びるのかということにも興味があり、教育について学びたいという思いで、大学では教育学を専攻。卒業後は地元で教師の道を歩み始めたが、何か他の先生が持っていない自分だけの武器を身に付けたいと思い、現職教員特別参加制度を活用して、青年海外協力隊として2016年7月に再びアフリカの大地を踏んだ。

あるもので工夫した理科実験が 生徒たちの心を奪った

派遣されたのは、アフリカ・ルワンダ。首都キガリの中心部から車で30分ほどに位置するガサボ郡の中高等学校に配属された。約50人いる1年生を対象に、物理と化学の授業を担当した。空いた時間には、現地教員の授業を見せてもらいアドバイスしたり、理科室の

管理を行った。赴任してすぐの期間は、語学力のなさから伝えたいことが伝わらず、活動への焦りも相まって人間関係がうまくいかなかった。生徒たちの時間のルーズさや物を大切にしないことなど、感覚の違いに苦労させられたが、彼らには彼らの文化や習慣があると考えを改めることで、「現地のやり方に寄り添ってのんびりやればいい」と思考を切り替えることができた。

プロジェクターを使用して授業を行う。授業をはじめ、校務に真摯に取り組む布川さんは、他の教職員にとって模範的な存在だという。

職員室で教材研究を行う。本年度からは理科主任として理科教育を牽引している。

理科の実験のために石灰水を準備する。様々な制限がある中で、工夫を凝らした実験が生徒に人気だという。

現地は恵まれた実験環境ではなかった。そこで、ペットボトルで水の電気分解装置を作ってみたり、コーヒーフィルターを使用したペーパークロマトグラフィーの実験を行うなど、工夫を凝らしてみた。実験器具の取り合いになるほど生徒が夢中になり、感心した先生たちからも実験方法を尋ねられた。

他の理科教育隊員と一緒に、現地教員向けのワークショップも行った。そこで教えた実験や授業方法を後日授業で実践してくれていた、と聞いたときはとても嬉しかった。

国際理解教育を通して アフリカへの理解を促したい

参加目的であった、他の先生が持たない武器「国際協力経験」を身に付けて帰国した布川さん。2018年4月に教職復帰し、徳島市内の吉野川にほど近い徳島県立城ノ内中等教育学校で理科の教諭を務めている。現在は1年生を担任し、サッカー部と囲碁将棋部の顧問として生徒たちに親身になって関わっている。また、学校の特色でもある校外体験活動の計画・運営の中心となり、学校の頼れるミドルリーダーとしても活躍中だ。

帰国して4年。受け持つ学年の「総合的な学習の時間」に国際理解教育の授業を組み込み、アフリカやルワンダについて実体験に基づいた教育を、毎年生徒に発信し続けている。「途上国を支援する方法を生徒たちに尋ねた時、出てくるのは“お金の寄付”や“衣服を送る”などの答えでした。それだけでなく、技術や知識を伝えることも支援につながる。そして、“時間を守ること”や、“物を大切にすること”、“誰にでも挨拶をすること”といった、日本で学ぶ基本的な礼儀や意識は、どこの国に行っても通用する大切なものだ、ということを伝えています」。授業が終わると、アフリカについてネガティブなイメージを抱いていた生徒から前向きな意見や感想が返ってくるようになった。生徒たちのアフリカに対する考え方を見つめ直すきっかけになった、とやりがいを感じた。

勤務先を飛び出して、県内外を問わず大学の教育学部などでも精力的に講演を行う。自分が伝えた協力隊経験談を通じてアフリカへの先入観をなくし、可能であればいつか現地にも足を運んでほしいと期待している。「アフリカは人口も多く、ビジネスチャンスに富んだ土地でもあります。私の力は小さいですが、学生たちがアフリカへの理解を深め、狭い世界にとどまらず広い世界に飛び込むことで自身の可能性を発見していってもらえたら」。

今後の目標について質問すると、「中学校の理科教員という安定した道だけでは収まらず、いろんなことにチャレンジしていきたい。無難に日々を送ることだけは避けたいですね」という頼もしい言葉が聞けた。子どもたちと共に、これからも布川さんの未来は広がり続けていくのだろう。

布川 匠二さん プロフィール

徳島県出身。広島大学教育学部卒業後、徳島で中学校教諭として勤務。在職中、JICA教師海外研修でアフリカ・エチオピアへ。2016年7月に現職教員特別参加制度を活用し、青年海外協力隊としてルワンダに赴任。帰国後は復職し、現在徳島県立城ノ内中等教育学校教諭。

布川さんへのエール！

徳島県立城ノ内中等教育学校　教頭
安崎 輝彦 さん

子どもたちに挑戦する心を伝え、県の教育を牽引して

優しく生徒思いで、誠実な布川さん。その温かい人柄で、生徒から保護者、教職員まで、厚い信望を得ています。何事にも手を抜かず熱心に取り組んでいる姿勢が印象的で、理科をはじめ学習の面白さ・大切さを生徒たちに分かりやすく伝えてくれています。授業で語る協力隊時代の貴重な体験談は、生徒たちを引きつけるほど魅力的。これからもその経験を生かし、何事にも果敢に挑戦する子どもを育て、将来的には本県の教育を牽引する教員になっていってほしいと思います。